

長 力 延 一 さ ん (論文集より)



私が小学校に入学したのは、岩松分教場です。その頃、ペンケニコロ川に丸木橋1本しかなく、雨の降るたびに流され、2日も雨降りが続くと、学校を休んだものでした。冬は氷で橋を架けるので、冬の季節は登校には便利だと感じたものでした。学校の向かい側に、駅通が建ち人の出入りは多くなり、道産馬を1人で3頭から4頭引いて、馬の背には揚げ荷をたくさん縛りつけ、道らしい道のない踏み分け道を山奥に入ってゆくのが、時々見られました。

旧土人保護法が施行され、旧土人の集団移動があったが、岩松(その頃パンケと称す)には、数人の原住民がおり、栄太郎とか、花子などの、和人の名前で呼ばれていた。中には旧名で、アチャホと呼ばれる原住民が、小川の近くで、木の皮を集め、三角小屋を造り生活していました。又、メノコは口元の周囲に入れ墨をしていましたね。非常に優しい声で話すのですが、子供心に、入れ墨が恐ろしく感じたものです。春になると毎年のように、山火事があり、雨の降るまで、何日でも燃え続けるのです。特に夜の山火事は誠に気味の悪いものです。これは、狩りをする原住民が、山を歩きやすくするため焼いたといわれています。今でも、時折思い出すのは、彼らが用いた、ケリ(靴)ですが、冬は獣の皮を丸め足首のところで縛って履いておりました。原住民の食糧は、鳥獣や川魚、夏は、鱒の遡上するのを追って、奥地へと移動し、鱒や山女、岩魚、などを薫製にしたものを背中一杯に背負い、寒くなる頃、2~3人集団で山を降りて来るのです。又、和人に慣れた者は、開墾に使用している馬の飼料として、トクサ、1束、1銭か、1銭5厘で買ってもらい、そのお金で、焼酎や、食糧を少しずつ買い求め生活していたようです。

屈足に水田が出来るようになり、家族共々水田耕作に移り、屈足に出ました。白い米を食べるのが夢でしたが、春の開田遅く、技術も悪いためか、収穫できるのは、3~4年に1回位のもので、全く泣く思いでした。やむを得ず、冬山造林人夫として働きに出ました。当時の日当は62銭、飯場賃20銭、軍手20銭、黒砂糖17銭でした。開拓とはどんな仕事でもやらなければ生きられません。

